第一章　アメリカ生活の始まり

私は、二〇〇〇年七月二十七日から二〇〇一年八月二十六日まで一年一ヶ月間、アメリカにあるハーバード大学に留学して来ました。「えきもん」の編集部から、アメリカ留学記を書かないかと誘いを受け、家族の記録として、アメリカで経験したことを書いてみようという気持ちになりました。そして、私達の経験をいきいきと感じてもらうために、アメリカに入国した七月から翌年の八月まで順を追って書くことにしました。一回に一～二ヶ月分位ずつ書いていこうと思っています。この連載シリーズが終わった時に、皆さんが私達家族と同じ経験をした様な気持ちになっていただければ幸いです。

私の留学したハーバード大学はボストンという町にあります。私自身が行くまで知らなかった位ですから、これを読んでいる大部分の人はボストンがどこにあるか知らないでしょう。しかし、アメリカでは大変有名な町で、アメリカ人なら一度はボストンに行きたいと思っている様です。その証拠に、ボストンには観光客が一年中訪れますが、その大部分はアメリカ人です。アメリカの他の観光地ではこういう現象は起らないそうです。土曜、日曜ともなると、ハーバード大学の周りは、地図を手にしたアメリカ人のお上りさんで一杯です。地元に住んでいる私達は、このお上りさんたちを余裕を持って眺める事ができました。そして、アメリカ人に優越感を持てると言うのは不思議な感覚でした。なぜこんなにアメリカ人に人気があるかと言うと、ボストンがアメリカで一番古い町でアメリカ独立戦争の舞台になったからです。また、アメリカに最初に移民した清教徒がメイフラワー号でたどり着いたのもボストンです。そこで、町の至る所に歴史的名所があります。日本で言うと、ちょうど京都とそっくりです。日本人が京都に行くのと同じ感覚でアメリカ人はボストンにやって来ます。私の家の大家さんは、「ボストンの歴史はアメリカの歴史だ」と言い切りました。

写真１．子供たちと。ボストン中心

アメリカの地図を見てもらえば分かりますが、アメリカ東海岸、つまりヨーロッパに一番近い所に、北から順に、ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントンと並んでいるのが分かります。どの町もアメリカで最初に栄えた町ですし、今もアメリカの文化の中心地です。ワシントンは政治の中心で、ニューヨークは経済の中心地です。そしてボストンは学問の中心地です。ボストンには大学が約八〇あり、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学(MIT)が有名です。ハーバード大学はアメリカ最古の大学で、おそらく現在、世界最高の大学でしょう。また、マサチューセッツ工科大学(MIT)にはノーベル賞を貰った利根川博士がいます。(実は、この人と子供の運動会で一緒の競技に参加しましたが、その話は後の章でお話しします)アメリカの古い町で、ノーベル賞受賞者が何人もいる大学があるという点でもボストンは京都にそっくりです。

ボストンのもう一つの特徴は、大変美しい町であると言う事です。普通、日本では町を作る時、木を切り広い更地にしてから沢山の家をたて、それから街路樹を植えますが、ボストンでは、一戸の家を建てるのに必要な最低限の土地の木を切り、他の木はそのままにしているので、森の中に家が建っているように見えます。私は大きな町の中心近くに住んで居ましたが、家の周りの木はどれも樹齢何百年という大木でした。ですから、大きな町にもかかわらず、森の中という感じでした。木はどれも昔からあるので種類は雑多で、ドングリなどの実のなる木が多く、家の周りでリスをよく見かけました。最初に家に着いた翌日に、家の前でリスを見た時は、家族で大騒ぎをして記念写真を撮りましたが、皆さんの御想像通り、やがて普通の事になりました。また、秋の紅葉も美しく遠くに紅葉狩りに行く必要は全くありませんでした。日本では、あんな不思議な大きな町は見た事も聞いた事もありません。木を大切にする気持ちの違いが町の姿の違いになっていると思います。

さて、八才と九才の小学生二人と三ヶ月の赤ん坊を連れて関西国際空港を飛び立ち、十四時間後にシカゴ国際空港に着いた時は、まだ、今まで何回か経験のある海外旅行の気分でした。しかし、日本航空の遅れで、シカゴからボストンに向かうアメリカン航空への乗り継ぎの時間が四〇分しかないと分かった時には顔が青ざめました。その短い時間で入国審査を終え、荷物を受け取り、税関を通り、アメリカン航空のカウンターに荷物を運ばなければならなかったからです。しかも、ビルからビルの間は離れていました。入国審査の長い列に並び、整理係の人にたどたどしい英語で「乗り継ぎの時間がない」と言っても「並べ」としか言ってくれません。ここはもうアメリカなんだと少し感じ始めました。ようやく入国審査を終わり荷物を手に入れた所で、アメリカン航空の係員が乗り遅れそうな我々を迎えに来てくれた時にようやくホッとしました。荷物はその人に預け、家族全員で搭乗口へ急ぐ姿を想像して下さい。私は赤ん坊を抱き、家内は二人の子供をせかします。乗り遅れても次の便で行けばいいじゃないかと考える方が居るかも知れませんが、実は、最終到着地のボストン空港に、紹介してもらったアメリカ人に出迎えを頼んでいたのです。遅れた場合を想定していなかったので、連絡の方法がなかったのです。また、電話番号が分かっていても、アメリカでの電話の掛け方を知らなかったのです。ようやく搭乗口に辿り着き飛行機に乗り込んだ時には、すでにエンジンが回っていました。荒い息のまま席に座り動き始めた飛行機の中を見回した時に、大変驚きました。その飛行機にはアメリカ人しか乗っていなかったのです。つまり、シカゴからボストンに向かう便はアメリカの国内線だったのです。何度も海外旅行をした事はありましたが、いつも最低でも何人かは日本人もしくは東洋人が乗っていました。アメリカ人の中に日本人は自分達家族しかいない、しかも、日本語は全く通じないと分かった時の衝撃を理解しもらえるでしょうか。数カ月後

に家内と話している時に、家内もあの時は衝撃を受けたと言いましたから、僕一人の特殊な感情ではなかったようです。こうして、これからは誰も助けてくれない、何でも自分達家族で解決しなければいけない生活が始まったのです。

第二章　ハラハラ、ドキドキの生活開始

さて、前回は、シカゴで入国審査を終えボストン行きの飛行機に乗り換えた所で話が終わりました。いよいよボストン空港に着き、荷物の受取場所で荷物を待っていると、若いアメリカ人（大学生に見えましたが、実は中学生でした）が近づいて何か話し掛けて来ます。最初、彼が私達を迎えに来たのだとは分かりませんでした。その理由は、荷物の受取場所に迎えの人が入れるとは思っていなかったからです。日本では飛行機を降りたら荷物の受取場所に行き荷物を受け取って、係員に引き換え券を見せて、出口の外で初めて出迎えの人に会えますが、アメリカでは荷物の受取場所は人が沢山いる通路にあります。そこには、今タクシーを降りたばかりの人もいます。つまり、荷物を盗もうと思ったら簡単に盗める状態にあるのです。アメリカでは、サムソナイトなどの旅行カバンには無くなってもかまわないものを入れて、大切な物は手荷物にするのが常識の様です。

彼が出迎えに来たのだと分かり、彼の英語を必死に聞き取りました。すると、「あなたの車をそこに持って来ている。父が先導するから自分で運転して家まで行きなさい」と言っています。実は、今回の旅行を手配してくれた日本の知人は、私達が着く少し前までボストンに住んでいたので、私達の家を借り、車も買ってくれていたのです。時差ぼけの状態で、いきなりアメリカの大都市を、右側通行で左ハンドルの車を運転するのは危険だと誰もが思うでしょう。しかし、彼は「大丈夫だ」と言います。私が、「自分は左側しか運転した事がない」と言おうとして left side という単語を使うと、彼は、「アメリカの車も左ハンドルだから問題ない」と言います。つまり、私の英語がへたなために、左側通行と左ハンドルを区別して伝えられないのです。アメリカに来て最初にそんな英語が必要になるとは思ってもいませんでした。そこまで言うなら自分で運転してみようかという考えが一瞬頭に浮かびましたが、後ろを見ると、私と彼のやりとりを見ている妻と子供達がいます。「私は疲れていて

運転できない。誰か運転者はいないか」と聞くと、「自分は父とその友人と三人で来ている。あなたの車はその人に頼もう」と言ってくれました。ホッとして荷物を押してドアを出ると、そこにアメリカの車とカローラ（アメリカで人気があるのはカローラかクレスタです。理由は、エンジンの性能が良い事とエアコンが故障しない事です）が止まっていました。二台の車に分乗して空港を出発しました。

車窓から見る町並みはイギリス風のレンガ作りの家が多く、さすがハーバード大学がある古い町だけのことはあると感心しました。二〇分ほど走り、やがて周囲の木が多くなり車が森の中を通るようになると、絵本に出てくるような綺麗な家が大きな木の間に、ちょうど日本の山の中の別荘地の様な感じで建っています。別荘地かなあと思っていると、車が一軒の家の前で止まりました。そして、「ここがあなたの家だ」と言います。見てみると、二階建てのアメリカ風の家です。一階にフランス人の研究者の家族が住み、二階が私達の住む所でした。家賃が高いボストンでは、一軒の家を一家族に貸す事はあまり無く、上下あるいは左右に分けて二家族に貸すことが多い様です。

荷物を下ろし鍵を渡すと、ここまで案内してくれた人たちは、Good luck!と言って笑顔で去って行きました。彼等の態度からは、『世話をしてやっている』という感じを全く受けませんでした。奉仕に見返りを求めないし、それが態度にも表れないのは、アメリカ人のすばらしい点の一つです。人を助けると、いつか良い事があると言うのが我々日本人の道徳ですが、彼等は、人を助ける事そのものが自分を良くするのだという道徳を持っています。見返りとは無関係に、自分が良い人間になれるから他人に奉仕するという考えです。

さて、中に入り各部屋を見て回って、娘が最初に言った言葉は、「こんな広い所に住んで良いの？」でした。数カ月後に、娘が通う小学校の同級生の中で、私達の家は小さい方だと

写真２．家の前で手を振る大家さん

分かるのですが、私達には最後まで『広い家』でした。冷蔵庫にはミルクとジュースがガロンビン（三．八リットルビン）で用意され、果物や肉も入っていました。私の知人が三日分の食料を用意してくれていたのです。それに、家具つきで家を借りたので、すぐに生活できる様になっていました。現地時間で午後三時、日本時間で午前四時です。少し眠いのを我慢して、早い夕食をとり風呂に入り、夕方七時半から翌朝八時まで家族全員がぐっすり眠りました。

翌日、家の近くがどうなっているか調べるために、私一人で家の周囲をドライブしました。最初は恐る恐る運転していましたが、三〇分位すると慣れて来て、要するに自分は左利きだと思い込めばいいんだなと分かりました。対向車は左側からやって来るし、ウインカーは左手で操作します。つまり、左半身を常に意識する必要があります。アメリカに行って数カ月間は、「自分は左利きだ、左利きだ」と呪文の様に唱えながら運転していました。一時間程、家の周囲を走り、自分の家はボストンの一部であるアーリントンという町（独立戦争で有名な町ですが、禁酒法が未だに残っている町としても有名です）の中心から五〇〇ｍ位の所で、町を東西に貫くマサチューセッツ大通りから一本入った道路に面していると分かりました。そのマサチューセッツ大通りにはアーリントン高校（高校と言っても日本の短大くらいの敷地と建物があります）があり、私の家の裏はそのグランドに面していました。また、近くには、大きなスーパーマーケットが二軒あり、図書館や郵便局、さらに子供病院もありました。要するに、緑に囲まれた大変便利の良い所に家があったのです。

アメリカで生活を始めるために、最初の一ヶ月間は次から次に問題を解決する必要がありました。次回は、研究室と子供の学校の事を中心にお話する予定です。

写真３．リビングにて

第三章　研究室と小学校

前回は家の事を書きましたので、今回は研究室と子供の学校についてお話しします。

私が留学したハーバード大学の医学部は、幾つかの単科の専門病院以外に二つの総合病院を持っています。一つは有名なマサチューセッツ総合病院です。この病院は臨床系の世界最高の雑誌である New England Journal of Medicine を発行しています。もう一つの総合病院がベスイスラエル医療センターです。こちらはマサチューセッツ総合病院ほど有名ではないため、常にマサチューセッツ総合病院に追い付こうと努力しています。どちらの病院にも多くの日本人研究者がいますが、私はベスイスラエル医療センターの腎臓内科で研究をしました。

私のボスの名前はビーカス　スカトメ（Vikas Sukhatme）と言い、ハーバード大学医学部の教授でベスイスラエル医療センターの腎臓内科の主任教授でした。彼は、名前から分かるようにインド人で、アメリカの高校を卒業後にマサチューセッツ工科大学（ノーベル賞受賞者が沢山いるところです）の物理学科の大学院を修了し、その後にハーバード大学医学部を卒業した人です。年令は五〇過ぎでしたが、非常に頭の良い人で、研究上のディスカッションを厳密に行なう事ができたのは幸せでした。何事も合理的なはずのアメリカで、論理的に物を考えられないボスの下で働き、嫌な思いをしている日本人研究者は多いのです。

私が行ったときは、研究室には私以外に八人の研究者がいて、内訳はインド人が四人、アメリカ人が一人、中国人が一人、ベネズエラ人が一人、そして日本人が一人いました。このうちの五人が医者で、三人は診療と研究の両方をしていました。日本人は東大の腎臓内科から来た花井先生で、後で、色々な場面で助けてもらいました。

アメリカに着いて五日目の八月一日に、ベスイスラエル医療センターの五階の腎病棟に隣接する研究室に行きました。腎臓内科の主任教授ということなので、背の高い貫禄のある

写真４．研究室の仲間と病院の玄関で
中央の白いシャツの男性がボスのビーカス

大男を想像していましたが、初めて会うビーカス（研究室ではいつもこう呼んでいました）は日本人から見ても小柄な普通の体型の人でした。初対面の時に英語が通じなかったらどうしょうかと悩んでいたのですが、彼の英語が良く聞き取れ会話はスムーズに運びました。これには理由があって、彼の英語はイギリス英語だったのです。アメリカ英語は「ル」と発音する時に強く巻舌にするために口の中でモゴモゴと言うことになり、非常に聞き取りにくいです。しかし、イギリス英語は日本人の英語の発音に近いため聞き取りやすいようです。私の知り合いに、初めてアメリカ人のボスに会った時に全く相手の言う事が聞き取れず、ボスから三ヶ月間英会話学校に行かされた人がいます。その点で私は幸運だったのかもしれません。

ビーカスから全研究員の現在の研究内容を説明してもらい、次に私の研究テーマを決める事になりました。日本での私の博士論文のテーマは細胞分裂に必要な未知の遺伝子を見つけることだったので、腎臓病の新しい遺伝子を見つけたいと言いましたが、滞在期間が一年なので血管内皮細胞の増殖抑制について研究することになりました。腎臓には血管から老廃物を除去するために多くの毛細血管が集まっています。そして毛細血管の内側を作っているのが血管内皮細胞です。つまり血管内皮細胞の増殖をコントロールすることは腎臓病の治療法の開発に必要なのです。少し不満がありましたが、自分の力を分かってもらってから再度遺伝子発見の仕事を提案すればいいかと考え承諾しました。後から分かるのですが、アメリカでは最初の合意事項が後々まで影響するため、最初にしっかり自分の意見を言っておく必要があります。この時に、日本式のいつかは分かって貰えるし、その時に言えばいいという考えを持ったために、結局、最後まで血管内皮細胞の増殖抑制の研究が続くことになりました。

研究室で起った沢山の面白い話は後の章に譲ることにして、子供の学校のことに話題を変

写真５．後に見えるのがベスイスラエル医療センターの病棟

えましょう。私の子供達はアメリカに行った当時、三ヶ月、七歳（小学二年生）、九歳（小学三年生）でした。ニューヨークでは、全日制の日本人学校に通学させる親も多い様ですが、ボストンには土曜日だけの日本人学校しかないことと、子供にアメリカ文化を体験させるために地域のアメリカの子供達が通う普通の小学校に通わせる事にしました。アメリカでは家賃が高い地域は治安が良く学校のレベルも高いということは常識なので、最初から家賃が高い地区を選んでいたのです。私達の住んでいた地域は、白人が多いアーリントン市の中でもさらに白人が多い所でした。

　我々が着いたのが七月末で新学期は九月から始まりますが、早めに一度学校を見ておこうと、着いて二～三日後に小学校に出かけました。小学校は家から一㎞ほどの小高い丘の上にありました。行って驚いたのは、小学校が日本に比べて小さいという事です。アメリカでは小学校は地区の住民が納める金で建てられるし先生の給料もその中から支払われるので、大きい建物を建てる余裕がありません。木造に近い平家と二階建ての校舎です。日本の幼稚園を大きくしたような感じを受けました。体育館も古く小さく、プールはどこにもありません。運動場も狭く何処が運動場かはっきりしません。この様に施設は貧弱ですが、教育内容は地域の住民が決めます。校長先生も住民が採用します。自分達の子供の教育に自分達が責任を持つというのが開拓時代から続くアメリカの伝統です。プールつきの立派な校舎を建ててもらう換わりに、文部省の言う事を、たとえそれが間違っていても全て聞かなければいけない日本の学校とどちらがいいでしょうか。日本の学校教育が崩壊しつつある原因は、文部省が市町村に教育内容の決定権を与えていないからだと思います。創意工夫が許されない組織は沈滞し、やがて崩壊するというのが私の持論です。ニュージーランドの様に文部省を解体する所まで行かなければ、日本の教育は良くならないでしょう。

話が脱線しましたが、私達が学校を見に行った時は夏休みだったので、誰もいないだろうと思い校舎の中を覗くと、短パンにTシャツの太ったおじさんが何かしています。しかも一人です。校長に会うために面会の日を予約しておく必要もあったし、この際、学校の事も教えてもらおうと考え、恐る恐る家族全員でドアを開けて中に入りました。入ってその人に、「自分達は日本人でここに着いたばかりです。二人の子供は小学生なので九月からこの学校に通わせたい」と言いました。するとその人は、子供の生年月日を聞き、日本で三年生の娘は四年生で、二年生の息子は三年生になると言います。アメリカでは九月に新学年が始まるので、六月生まれの娘が四年生になるのは分かっていましたが息子は二月生まれなので二年生のままのはずです。息子は違うはずだと言うと引き出しから過去の生徒の資料を取り出し、しばらくして「あなたの言う通り二年生だ」と訂正しました。頼り無いなあと思いながら、「校長先生に面会する日を予約したい」と言うと一瞬彼が困った顔をしました。その瞬間、私はハッと気付き、あわてて「大変失礼しました。あなたは校長先生でしょうか」と言うと、彼は「そうです」と答えます。「私達は不馴れであなたの事を知らなかった」と弁解すると、彼は「今から教室を案内してあげよう」と言ってくれました。まさか校長が短パンにTシャツ姿で入り口そばの受付に居るとは思っていませんでした。彼の名誉のために付け加えると、新学期が始まってからは彼はいつもネクタイを絞めていました。彼の案内で娘と息子の教室の中を見せて貰いましたが、壁一面に生徒の作品が飾ってあり机の向きもバラバラで、日本の幼稚園の教室の様です。そして、各教室に先生の個性が強く表れているという印象を持ちました。後で知った事ですが、校長は全体の教育方針を決定しますが、具体的な教育方法、つまり、どんな教材を使いどう教えるかは各教師に任せられているのがアメリカでは普通だそうです。

第四章　九月

九月になると夏休みが終わり、突然町に人があふれて来ました。小学校も九月五日から新学期が始まりました。なぜこんな中途半端な日から始まるかと言うと、九月の第一月曜日が勤労感謝の日だからです。アメリカの小学校は六月二〇日頃から夏休みになりますから、二ヶ月以上の長い休暇です。もういい加減に始まって欲しいのに、勤労感謝の日があるためになかなか始まりません。ちなみに、アメリカの小学校では、夏休みには宿題はありません。子供達は二ヶ月半の間、遊ぶことに専念します。

さて、九月五日の朝八時に子供たちを車で小学校に送って行き、校長に言われていた様にグランドに行くと約二〇〇人の子供たちがクラス毎に列を作っています。その先頭にはクラス担任の教師が立っていて、子供を連れてきた親と話をしています。私も、息子と娘の担任の先生に挨拶して子供を渡しました。一学年二クラスで全校で五学年です。六年生からは中学校に通います。二年生の息子の担任は二十五才位の美人の Ms. Corbett（コルベット）で、四年生の娘の担任は四〇才位の太り気味の Ms. Tierney（ティアニイ）でした。（女性を呼ぶのに Miss や Mrs. と言う言葉はあまり使われず、Ms. と言うのが一般的です。発音はミズです）八時十五分になると、クラス毎に隊列を作って教室に入って行きました。そして授業が始まります。つまり、アメリカの小学校では、始業式はありません。同じように終業式もありません。あるのは卒業式だけです。形式に意味はなく、内容に意味があるという考え方だと思います。そして、卒業はやり遂げたことの証明なのでお祝いします。

ここで賢明な読者の方は、「校庭にクラス毎に並んだのは、一種の始業式ではないのか」と思ったでしょう。しかし、校庭に並ぶのは毎朝の日課であって特別な事ではないのです。アメリカの小学校では生徒は勝手に教室に入ることは出来ません。必ず毎朝、クラス毎に隊列を作って校舎に入ります。帰るときにも隊列を作って校庭に出ます。教室から体育館や食

写真６．娘と Ms. Tierney

堂に移動する時も隊列を作ります。さらに驚くことに、授業と授業の間の決まった休み時間がありません。「子供を校舎の中で自由にさせると騒いで物を壊す」というのがアメリカの教師の常識のようです。最近、NHKでイギリスの小学校教育についての特集番組を見ていると、アメリカと同じように生徒が朝、隊列を作って教室に入って行きましたから、欧米人の常識なのかもしれません。休み時間に廊下で騒いでもそれほど叱られる事のない日本の子供は幸せです。日米の小学校教育を比較すると、ある一点を除けば日本の小学校教育は世界最高だと思います。（ある一点については別の機会にお話します）但し、断っておかなければいけませんが、日本の中学校教育は中レベルで大学教育は最低レベルにあります。

さて、子供たちが教室に入るのを見届けて、私は約一時間離れた場所にあるベスイスラエル病院に行きました。午後二時半過ぎに、突然私の机の電話が鳴りました。恐る恐る受話器をとると、女性が英語で怒った様な声で何か言っています。よく聞くと、小学校の教師からの電話で、「あなたは、なぜ子供を迎えに来なかったのか。今日は仕方がないから私が家まで送った」と言っています。私の家から小学校までは一km程離れており、歩いて二〇分位の距離です。事前に子供たちと歩いてみましたし、誘拐を心配して校長に「歩いて通学して大丈夫ですか」と尋ねてもいました。私が「誘拐」という言葉を使った時の彼の反応は、場違いな言葉を聞いたという感じでした。彼の返事は「この辺は安全なので大丈夫だ。むしろ私は生徒に体を鍛えるために歩いて来なさいと言っている」でした。そこで安心して、子供たちに歩いて帰って来る様に言っていたのに、電話口の先生は迎えに来なかった私を常識外れの人間の様に言います。私は「校長先生に聞いたら歩かせて大丈夫だと言われた。それに私の職場は遠いので迎えに行けない」と返事すると、「明日の朝、みんなで話し合いたいから、七時半に来なさい」と言います。翌日、子供を送って行った後で教室に行くと、教師たちが

私を待っていて、「あなたの子供達は小さいし場所に不慣れなので、交通事故が心配なのだ。何とかして迎えに来て欲しい」と言います。後から知った事ですが、小学校では、授業の後、先ほどお話したように隊列を作って校庭に行き、そこで迎えに来た親に手渡されるのが普通です。それなのに、アメリカの学校生活第一日目から迎えに来ない親は、教師達には非常識に見えたのです。

最初からここまで読んできて、皆さんはある点に気づいたのではないでしょうか。そうです、私の家内が話に登場して来ないのです。これには理由があって、家内はペーパードライバーで、運転を日本で二～三度しかしたことがなかったのです。日本を出る前に運転を練習するように言ったのですが、お産と留学の準備が重なり時間がとれませんでした。家内は運転が出来ないために、日本なら母親がするはずの学校関係の事が何も出来ず、家に赤ん坊と居ることになりました。後で、アメリカにいる日本人達から「アメリカで運転できないことは犯罪行為よ」と何度も言われましたが、まさに真実でした。これは、「アメリカで運転出来ないと、周囲の人に迷惑をかける」という意味です。日本で怖くてハンドルを握ろうとしなかった家内は、アメリカではさらに恐がりましたが、少しずつ運転を開始し、二ヶ月後には普通に運転出来る様になりました。

しかし、とりあえず今日の放課後をどうするかが問題になります。家内が運転出来ないことと私の職場が遠い事を説明し、妥協案として家のそばの交通量の多い道路の交差点まで家内がバギーを押して迎えに行くことにしました。子供達はそこまで歩いて帰って来ました。

この話には、嬉しいことが一つあります。アメリカでは小学校の通学路の大きな交差点には、登下校時には必ず女性警察官が立っています。通学路の交通当番は、日本ではお母さん達が交代でやっていますが、何かあったときのためにアメリカでは警察官の仕事になってい

ます。新学期の二日目以降、毎日、家内と子供達が待ち合わせをするので、やがて、この女性警察官と親しくなり、待っている時間に家内や子供たちと話をする様になりました。笑顔の多い優しい人で、日本に帰る時に子供達は彼女にプレゼントを渡しました。

さてここで、またしても賢い読者の方は一つの疑問を抱いたのではないでしょうか。私の子供達は小学校二年と四年でした。日本では二年生と四年生は終業時間が違うため一緒には帰れません。なぜ子供達は同じ時間に帰れたのでしょうか。その答えは、私が居たボストンでは小学校の全生徒の授業が午後二時十五分に終わるからです。一年生が十二時に帰り、五年生が午後四時に帰ったら、親が何度も学校に迎えに来なければいけません。もし子供が三人いたら大変です。また、一人で帰る子供が出てきて危険です。そこで、一番合理的で安全なのは、中間をとって二時十五分を終業時間にすることです。恐らく、彼らが日本の小学校の終業時間が学年毎に違うと知ったら、大変驚くと思います。そして、「何でそんな危険な事をするのか」と言うでしょう。実は、放課後に友達の家に遊びに行くのにも親の送り迎えが必要なのです。子供達だけで遊びに行くことは絶対にありません。日本は大変安全な国で、子供の天国です。アメリカは子供にとっては住み難い国です。その代わり、大人にとっては住みいい国です。日本と反対です。

学校が始まり子供達の英語の問題がすぐに起こります。そして、この問題はアメリカ留学記の重要な部分の一つですが、真顔でお話しなければいけない内容になります。しかし、読者の皆さんは話の進行が遅いのでイライラしているかもしれませんので、来月はハロウィンやクリスマスの話をします。そして、その次の月に英語の話をしようと考えています。

写真７．息子に個人指導をしている Ms. Corbett

第五章　ハロウィンとクリスマス

前回まで、不安だらけの生活についてお話しましたので、今回は私たち家族全員が楽しんだハロウィンとクリスマスのお話をします。

ハロウィンの日は一〇月三十一日です。一〇月になると、ハロウィンの準備を開始しなければいけません。最低限必要なものは、仮装の衣装とカボチャそれにカボチャを削るためのプラスチックのナイフと子供達にあげるお菓子です。このうちカボチャとナイフ以外はトイザラスで手に入ります。私の息子は黒い幽霊の衣装を買いました。娘は魔女の衣装を家内に作って貰いました。一般的には、男の子は人を驚かす衣装を買い、女の子はシンデレラの様な綺麗な衣装を買っていました。お菓子はチョコレートの小さな包みが大きな袋で売っています。

カボチャは、農場の作物売り場が町の近郊にあり、そこに小型自動車のタイヤ程の大きさのカボチャが山のように売っています。私たちもそこに買いに行きました。さて、そこで私たちが悩んだのは一体何個買ったらいいのかと言うことでした。周りを見ると、皆、手押し車に三〜四個積んでレジに向かっています。そこで私たちは少し遠慮して三個買いました。後でこの数が正解である事が分かります。

一〇月中旬になると学校からパンプキンカービング大会の案内が来ました。名前からすると、カボチャを削り、その出来映えを競う会の様です。しかし、学校の体育館で夜七時から開くと書いてあります。そんな遅い時間に子供が学校に行って良いんだろうかと疑問を抱いたまま当日を迎えました。夜七時に、家にある三個のカボチャを車に積み学校に行きました。家族はまだ半信半疑のままです。そこで駐車場の車の中に家族を残し私一人が様子を見に行きました。体育館に行ってみると、大勢の大人と子供がジュースを飲んだりお菓子を食べたりしながらカボチャを削っています。私はすぐに車に戻り家族にその事を話しカボチャを運

写真８．ハロウィン用のカボチャの前で

びました。子供達は同級生を見つけ、私たち夫婦も知り合いに挨拶し席に座りました。どうやって削ったらいいのか分からなかったので隣の家族に聞くと、削り方を教えてくれ、更にカボチャを削るためのプラスチックのナイフを貸してくれました。（実は、プラスチックのナイフはコンビニに売っていると聞いて買いに行ったのですが、どこも売り切れで最後まで手に入れることが出来なかったのです）。後は、楽しくカボチャを削りました。その時、子供達は一個づつカボチャを削ります。家族全員で参加するので親の分が一個余分に要ります。つまり、我が家は三個必要でした。一時間半程してから壇上に子供達の削ったカボチャを並べ審査が行われました。全てのカボチャに賞が与えられ、楽しい夜を過ごしました。

さて、いよいよ一〇月三十一日になりました。日本人会の知り合いから、小学生は六～七時頃から近所を回ると聞いていましたが、私たちが住んでいる地区には日本人は私たちだけでしたので確信が持てません。またしても私が様子を見るため、一人で六時半に車で校区を回ってみました。何カ所かで親に付き添われた子供達が近所を回っていました。急いで家に帰り、着替えて用意していた子供達と、まず、一階に住んでいるドイツの大学教授の家庭を訪問しました。子供達が、「Trick or treat!」（お菓子を呉れないとイタズラするぞ）と言うと、「かわいい服ね」と言いながらお菓子を沢山くれました。それから周りの家を訪問しました。周りの家でも同じように歓迎されました。特にお年寄りの家庭では、今年も子供が来てくれたという雰囲気で喜ばれました。子供達は籠一杯のお菓子を手に入れ大満足でした。

ここでお話しておかなければいけませんが、ハロウィンにはルールがあります。それは、玄関の灯りが点いていない家は訪問してはいけないという事です。アメリカの家はどこでも夜玄関の灯りを点けます。しかし、ハロウィンの夜に灯りが点いていないという事は「来て

写真９．ハロウィンの日、下の階の住人と一緒に

欲しくない」という合図なのです。また、ハロウィンは小学生以下の子供の遊びなので、中学生以上でハロウィンの日に騒いでいると、怖がられます。私も中学生のグループが大きな声を出しながら家に近づいて来たときには、玄関の灯りを消しました。

さて、ハロウィンの次の楽しい行事は十一月の第四木曜日の感謝祭 Thanksgiving Day ですが、それは跳ばしてクリスマスのお話をします。

日本では十二月から町のクリスマスの飾り付けが始まりますが、楽しいことは少しでも早くしたいアメリカ人ですから、感謝祭の後すぐに町中にクリスマスの飾り付けが見られます。そして、ハロウィンの時にはカボチャが並べられていた農場の作物売り場に二・五mから三・五mの高さのモミの木が何百本と並べられています。また、綺麗に作られたリースが沢山売られています。リースは一個十五ドル位です。特に驚いたのは、モミの木が一本四〇ドル位で売られていた事です。日本円で五千円位です。これらのモミの木は山から切ってきたものではなく、この日のために栽培されたものなので安いのです。各家庭で一本ずつ買い、水が入れられる専用の固定台に据えて居間に置き飾り付けをします。モミの木は水を切らさなければ三週間は青い葉のままです。

私たちは、少し低いモミの木を買いました。それでも二・五mありました。さて、ここで問題です。アメリカでは何でも買った物は自分で運ぶのが原則です。宅配サービスはありません。では、どうやってみんな買ったモミの木を運ぶのでしょうか。私も最初は疑問に思いましたが、みんなが運ぶのを見て呆れてしまいました。実は、モミの木を車の屋根にくくりつけて運ぶのです。こう言うと、屋根にキャリアーの付いた車を想像するでしょうが違います。普通車の屋根にひもでくくりつけるのです。運転中、モミの木が屋根をこすって傷がつきますが、気にしません。車の性能はエンジンとエアコンです。傷は関係ありません。また、

車を売るときの評価にはなりませんから、安心して屋根にモミの木を載せられるのです。私も買ったモミの木を屋根に載せて帰りました。もちろん警察を気にする必要はありません。良い国です。

家にモミの木を持って帰って一番喜んだのは家内でした。「一度こんな大きなクリスマスツリーを飾りたかった」と言っていました。私も、まさか子供の時の夢がこんな所でかなうとは思ってもいませんでした。みんなで飾り付けをして、一番上の金色の星は父親の私が飾りました。これは習慣のようです。

小学校は十二月二十一日から休みになりました。子供達は、休みの前の日には担任の教師や図書の教師などにクリスマスカードを渡しました。家でも、郵便配達人に二〇ドルの小切手を切り郵便受けに入れておきました。また、教師に直接親が贈り物をする習慣はないので、教師の名前で教育財団に二〇ドルづつ寄付をしました。これがクリスマス前の感謝の気持ちの表し方です。

十二月二十四日は、夕方、クリスマスの食事を済ましケーキを食べると、早めに家族全員風呂に入りました。実は大家さんがクリスチャンのため、アメリカで最も古い教会の一つであるトリニティ教会のクリスマスミサに誘われていたのです。夜一〇時に大家さん（いつもメアリーさんと呼んでいました）が迎えに来ました。普段はラフな服装をしているメアリーさんがこの日は綺麗に化粧をして毛皮のコートを着ています。アメリカ人にとってクリスマスは特別な日なんだなと感じました。我々も正装していました。車で三〇分程走りボストンの中心部に行きました。普段は観光客で溢れているトリニティ教会の周囲も今は静かです。正装した人々が教会の正面の入り口から入って行きます。私たちも中に入り後方の長椅子に座りメアリーさんの説明を聞きながら待っていました。十一時三〇分からミサが始まり、祈

写真１０．クリスマスディナー

りと歌が一時間程続き最後に「諸人こぞりて」を歌って終わりました。私たちも英語で一生懸命に歌いました。一時半過ぎに家に帰りメアリーさんにすばらしい体験だったことをお礼を言って別れました。大きなモミの木を飾ったり、アメリカで最も古い教会でクリスマスミサを経験するとは、日本を出る時は想像もしていませんでした。こんな経験はもう出来ないだろうと思います。

さて、次回は留学の最大の難関である子供達の英語についてお話しします。恐らく、日本ではこの事について報告されることは少ないし、親に連れられて外国で生活している何万人もの日本の子供達の本当の姿を皆さんは知らないだろうと思います。

第六章　私の一日（前編）

今回は子供たちの英語についてお話する予定でしたが、構想を練る十分な時間がとれないため、予定を変更して、アメリカでの私の一日の話をします。ただし、紙面の都合で朝の話になりました。

私は毎朝七時に起きていました。夜泣きした赤ん坊の世話で睡眠不足の家内をそっと起こし、顔を洗い、歯を磨き、服を着替え、子供を起こし、朝食を食べます。朝食はミルクにオレンジジュース、そしてパンに果物です。果物は南米から輸入されるため驚くほど安く、いつも食卓にあふれていました。ミルクとオレンジジュースはもちろん一ガロン、つまり三・八リットルのビンに入っています。

ここまでは日本の家庭の朝の風景と変わりありませんが、ここからが違います。七時五〇分になると子供たちを学校に送って行かなければなりません。この時、私と子供たち、家内と子供たちが抱き合った後にお互いに頬にキスをします。アメリカでは普通の光景です。我が家では子供が幼稚園の時から日本でもそうしていたので違和感はありませんでした。

それから大急ぎで車に乗り、学校へ出発します。学校までは五分の距離です。歩いても行けますが、学校から言われているので毎日私が送って行きました。赤ん坊が寝ているので、家内は家に残らなければなりませんでした。学校には塀も門もありません。通りから芝生を隔てて校舎があります。ですから、いつでも誰でも敷地内に入ることが出来ます。学校の前の通りには子供を送ってきた父母の車があふれています。子供たちは母親や父親にキスをして朝の集合場所であるグランドに向かいます。私の子供も私にキスをして車から降りて行きました。学校の始業時間は八時十五分です。

子供たちが仲間の所に向かうのを見届けてから、私はすぐに家に戻りました。実は、私が乗るバスが、家の前のバス停に八時二十五分に着くのです。車を車庫に入れてバス停に向か

うと、いつもすぐにバスが来ました。
バスは前から乗り込み、運転手にGood morning. と言い七十五セント（約一〇〇円）を払います。運転手もGood morning. と返事をします。アメリカでは誰に会っても挨拶します。人に会って挨拶しないと、無教養な人間か自分に敵意を持っている人間のどちらかだと思われます。
アメリカでバスに乗って驚くことが二つあります。一つ目は、日本ならバスの後部に窓がありますが、そこにエンジンがあるため後ろが全く見えません。そこで、後部座席に座ると、頭の後ろでエンジンがうなっています。よくこれで安全運転ができるなあと不思議でした。ただし、この席は冬は暖かくて快適です。二つ目に驚くことは、降りることを知らせるボタンがないことです。その代わり、バスの壁に黄色のテープが張り巡らしてあります。このテープのどこを押してもチャイムが鳴ります。最初はなぜこんな無駄なことをするのか不思議でしたが、アメリカ人が他人との不必要な体の接触を嫌うことが分かってからは納得しました。ボタンを押すためには、人の体の横や上に手を伸ばす必要があります。これでは人に触ってしまいます。
さて、バスの中から町の朝の風景を眺めていると、十五分ほどで一番近い地下鉄の駅エールワイフ(Alewife) に着きます。バスから降りるときは、どの乗客もThank you. と運転手に言います。これに対し、運転手はHave a good day. と返事します。実にすがすがしい気持ちになります。
バスから降りた乗客の群れに混じって地下鉄の改札口に向かうと、途中に新聞の束を持った若者が立っています。この新聞は地下鉄会社がサービスで発行している新聞なので無料でした。名前はずばりMetro（地下鉄）です。内容は立派な新聞で、日本の新聞の地方版より

写真１１．地下鉄の車内

はるかに充実していました。ボストンで生活するために必要な日々の情報が載っているので、大変重宝しました。ノースウェスタン大学の学生がボストン総合病院の薬局に麻薬を盗みに入って捕まったとか、下町で起こった殺人事件だとか、テレビの全国ニュースでは流さないような内容なので身近に感じました。

さて、地下鉄の切符は一ドルでどこまで乗ろうと料金は同じです。毎日乗る私には定期券があります。この定期券は勤めているベスイスラエル病院で買うことができ、料金は給料天引きでした。駅に買いに行かなくてもいいのは大変便利です。アメリカ人の合理主義でしょうか。

エールワイフ駅は郊外から町の中心に向かう始発駅のためいつでも座ることができました。これから、病院のあるロングウッド（Longwood）駅で降りるまでの三〇分間は、私にとって学ぶことの多い有意義な時間でした。というのは、新聞を読んだあとは、周りの乗客の乗り降りを飽きずに眺めていたからです。電車の路線にはアメリカ人なら一度は行ってみたい有名な場所が続いています。エールワイから三つ目の駅はハーバードです。当然、ハーバード大学の本学があります。次の次の駅はケンドール(Kendall)です。ここにはMIT（マサチューセッツ工科大学)があります。さらに乗換駅のパークストリート（Park Street）はアメリカ独立当時の歴史的建物があり、ボストン観光の中心地です。乗り換えて五つ目のケンモアスクエア（Kenmore Square）には世界最初の野球場で今でも公式戦が行われるフェンウェイパーク（Fenway Park）があります。

ハーバードやケンドール駅では学生が乗り降りします。世界最高の頭脳を持つ彼らも、見かけは普通の若者です。パークストリート駅ではアメリカ人の観光客が降りていきます。なぜ観光客と分かるかというと、彼らは夫婦で行動し、しかも二人ともスニーカーを履いてい

写真１２．マサチューセッツ工科大学のメインドーム

るからです。ボストン・レッドソックスというメジャーリーグの本拠地があるケンモアスクエア駅では夕方になると、野球帽をかぶり手にはグローブをした親子連れが楽しそうに降りて行きます。その他にも色々な人が乗り降りします。ビジネスマンあり、ビジネスウーマンあり、黒人もアラブ人もインド人も東洋人も中南米人も乗り降りします。それらの人々の服装や行動を見ていると飽きることがありませんでした。

そうこうしているうちに、ハーバード大学の医学部地区の駅であるロングウッド駅に着きます。この駅から私が働いていたベスイスラエル病院にたどり着くためには公園の中を通らなければなりませんでした。この公園は一〇〇年前の状態を保存してある歴史地区に指定してありましたから、昔のボストンの自然が残っていました。小川には水鳥が遊び、大木の葉の間からは朝日がもれてきます。その中を歩きながら病院に向かうとき、本当にアメリカに来てよかったなあと思いました。

写真１３．世界最古の野球場フェンウェイパーク

第六章　私の一日（後編）

前回は、私が起きてから病院に到着するまでの話をしましたが、今回は病院の中での生活についてお話します。

さて、病院に到着して玄関に向かうときに必ずしなければいけない事がありました。それは、写真が入った身分証明書を取り出し体のどこかに着ける事でした。玄関には警備員が二～三名立っています。大抵の場合、彼らは筋肉隆々の黒人です。しかも、腰には本物の拳銃を着けています。病院ですから患者さんも入って来ますが、彼らは、身分証明書が無くても経験的に患者さんを見分けられるようです。問題は研究者です。皆さんは、研究者は白衣を着ているとお思いかもしれませんが、白衣を着ている研究者は三流です。一流の研究者は研究に没頭するほどその格好を気にしなくなりますから、泥棒と区別がつきにくくなります。そこで、無用のトラブルを避けるために、身分証明書を常に着けておく必要がありました。

ここで少し話が脱線しますが、日本の病院でも写真付の身分証明書を着けることがはやっています。しかし、日本とアメリカでは「写真」の重さが違います。アメリカでは、拳銃を持った警備員が本人であることを確認するために、必ず写真が必要です。極端な場合、その人物が泥棒であったとして、もし逃げた場合は拳銃で撃っても構わないのです。もう一つ付け加えると、身分証明書を作ってもらうためには、パスポートや運転免許証の様な、政府が本人であることを証明した物を警備員室に持って行く必要がありました。この様に、日本とアメリカでは病院における身分証明書の重さが違います。警備らしい警備の無い日本の病院で、写真付の身分証明書を首からぶら下げる意味があるだろうかというのが私の意見です。

さて、玄関を入り、なかなか来ない患者さん用のエレベーターは避けて職員用のエレベーターに乗り、五階の腎臓病棟に着きます。研究室は、この病棟のはずれにある透析室の手前のドアから入った所にありました。病棟の廊下を通る時に両側の病室の中が見えます。中に

写真１４．大理石造りのハーバード大学医学部本館

は、患者さんがベッドを起して寝ています。ちなみに、病室は全て個室でドアは開けてありました。日本の病院ではプライバシーの保護のために個室のドアは閉めていますが、私がいた病院では開けてありました。病棟勤務をしている同僚にその理由を聞かなかったので確信は持てませんが、ドアを閉めない理由は危険防止のためではないかと思います。つまり、患者さんは弱っていて、もし侵入者がいて何かをされても抵抗できませんし通報できません。病室のドアが閉まっていると発見が遅れます。そこで、誰かが侵入したらすぐ分かる様にドアを開けておくのが常識なのではないでしょうか。悲しい事ですが、日本の病院で入院中の少女が暴行されたという話を時々新聞などで読むと、アメリカの病院の対応は正しいと思えます。

話がそれましたが、病棟の廊下の途中からドアを開けて研究室のある建物に入ります。廊下は繋がっていますから、この建物でも腎臓研究室は五階にありました。入ってすぐの所にSukhatme（スカトメ）教授（私たちはビーカスと呼んでいました）の部屋があり、その隣が私の実験室でした。実験室に着くのは大体、朝九時頃でした。中には、インド人で理学博士のラマニとアメリカ人で小児科医のダンが既に来ています。彼らにGood morning.と言うと、彼らもGood morning.もしくはHi.と返事します。自分の机の上にカバンを置いて、中から電子辞書を取り出し、胸のポケットにボールペンを入れていると、反対側の机にいるラマニが、「昨日は何かあったか」と聞いてきます。そこで、帰宅途中にあったことや自宅でのことを少し話してから実験に取り掛かっていました。

実験室の中の様子を説明すると、ドアを入ると長さ二mで腰より少し高い実験台が四台入り口から窓に向かって縦に並んでいます。各実験台の窓側に机が置いてあります。つまり、実験台と机が一つのセットになっているのです。この一つのセットを一人の研究者が使いま

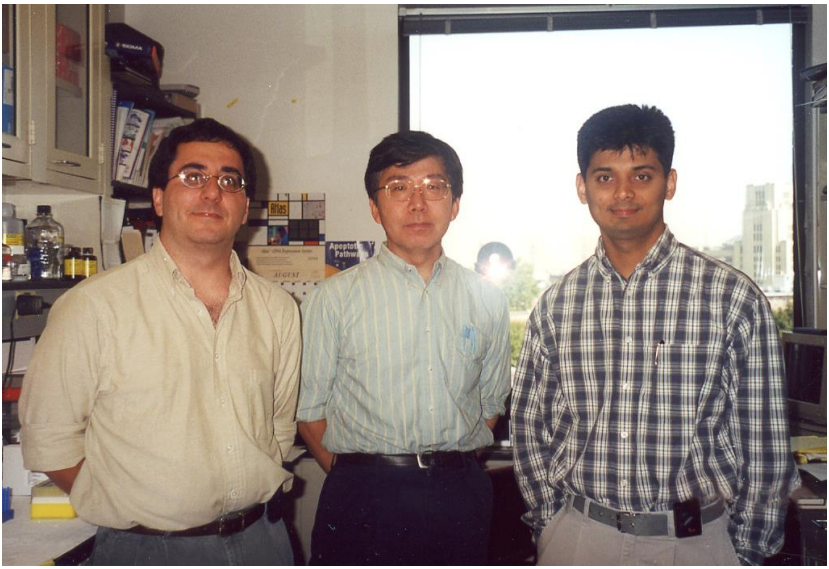

写真１５．実験室にて。左から、ダン、私、ラマニ

す。机の上には本棚があり、実験台には薬品棚が付いています。また、各机には専用の電話とインターネットの端末が置いてあります。電話は国際電話が直接掛けられます。これには理由があって、研究上、頻繁に国際電話を掛ける必要があり、いちいち交換台に申し込んでいては煩雑だからです。また、アメリカから掛ける国際電話は、日本国内の長距離電話より安いからです。

さて、ビーカスの研究室にはこの様な実験室が六室あり、他に薬品倉庫や遠心分離室、細胞培養室、写真現像室、低温実験室、三十七度実験室などがありました。これだけ多数の実験設備を持っていたのは、ビーカスが病院の腎臓部門の主任教授で、年間研究費を数百万ドル（数億円）貰っていたからです。九州大学医学部の私の後輩が同じ時期にハーバード大学の別の病院に留学していたのですが、彼のボスは助手だったため、研究室全部の実験台が３台しかありませんでした。研究費を集める能力の差が、研究設備にそのまま現れます。そして、肩書きを持っている人が研究費を貰いやすいのは、日本と同じです。

研究のやり方は細かくなりますので省くとして、実験をしていて昼の十一時半位になると、ラマニが食事をしないかと言ってきます。実験の区切りがついているときは三～四人で病棟の二階にある食堂に出かけました。食堂は、職員も見舞いの人も一緒に使っていました。広さは小学校の体育館の半分位で、それぞれの壁の部分にサンドイッチコーナーやピザのコーナー、定食コーナー、サラダコーナーなどがあり、自分の食べたい物を貰い、レジで支払いました。ちなみにレジの女性の挨拶は日本では「いらっしゃいませ」ですが、私が居た病院では、How are you, my honey?「元気？私の大好きな人」でした。最初これを言われたときは戸惑いましたが、やがて慣れて、Good, thank you. 「ありがとう。元気だよ」とニッコリしながらお金を払えるようになりました。町のマクドナルドで同じように言われたこと

写真１６．家の近くの秋の風景

はありませんから、あれは、病院内だけの習慣だろうと思います。つまり、病院で生活する者同士の連帯感から来るのだろうと思います。

さて、毎日、同じ研究室の仲間と昼食を摂っていたとお話すると、皆さんは英語が最初からペラペラだったのかと思うかもしれませんが、それは違います。実はこの食事時間が私にとってつらい事の一つでした。研究に関する話は理解できるのですが、話がニュースや映画などの世間話になるとさっぱり理解できないのです。出てくる単語が日本で習った単語の範囲をはるかに越えているため、全く付いて行けませんでした。それでも聞いているうちに理解できるようになるかもしれないと思い彼らの話を一生懸命聴いても、単語の意味が不明なので細かいところが理解できないのです。悲しいことにその細かいところが笑い話の重要な点らしく、みんなが笑っても何がおかしいのか分からないのです。彼らは私を話題の中に入れようとしてくれるのですが、つらい日々でした。ただし、耳が英語に慣れたのは事実です。

しかし、こんな中で一つ気づいた事があります。それは最後の一人が食べ終わるまで誰も席をたたないという事です。例えば、三人で食事をしていて、そろそろ皆食べ終わるころに、別の一人が席に加わって食べ始めたとしても、その後から来た人が食べ終わるまで誰も席をたちません。これは日本では見られない習慣だなあと思いました。この理由は、アメリカでは、食事は人と人が共通の時間を持つためにあるからだと思います。つまり、食べ物はどんな物でも良いのです。大切なのは、食事をしながら話をして、人と人が仲良くなることだからです。事実、我々日本人から見てあきれるほど粗末な食事をしながら、一時間も話が続くことがよくありました。食べ物を大事にするか、人を大事にするかの違いだと思います。あるいは、単に、おいしい料理がないから話すことに楽しみを見出しているのかもしれません。

さて、話が長くなりましたが、一時ごろ食事を終わり実験室に戻り午後の実験を開始しま

す。後は夕方六時まで実験をして、朝と逆の方法で家に帰るのが私の一日でした。他には、月曜の朝八時から他の病院の腎臓病専門医との合同勉強会があり、木曜の昼食時に研究室の研究検討会、金曜の昼１時から病棟の腎臓病症例検討会がありました。これらの会は全て会議室で食事をしながら行われました。食事と言っても、コーラなどのジュースとピザやサンドイッチでした。しかし、食事をしながら会議をすると、リラックスして良い意見が出やすいので、日本でもお勧めだと思います。

えきもん通信第三号～第九号まで連載